

Title	ルネッサンス古典絵画を見に行く：山岸先生の思い出
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.24- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0024">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0024</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ルネッサンス古典絵画を見に行く

——山岸先生の思い出——

有末 賢

山岸健先生には、社会学史、社会学説の大学院の授業でお世話になった。確か、先生が教授になられて、最初に大学院で開講された授業に、政治学専攻の修士課程の院生たちと出席していた記憶がある。さまざまな本を紹介してくださり、幅広く芸術にも造詣が深かった。後に、慶應義塾大学法学部に勤めるようになってからも、いろいろな刺激を与えてくださった。これから書くことは、社会学に関することでもないし、大学にかかわることでもない。あくまで、個人的なことに属するだろうが、人間・山岸健の思い出としては、共有されても良いのではないかと考えて書いてみることにした。

『レオナルド・ダ・ヴィンチへの誘い』や『絵画を見るということ 私の美術手帳から』(1997年)などの著書もある山岸先生は、無類の美術好きである。慶應義塾大学パレット・クラブの部長というか、顧問も義塾奉職中はずっと続けられておられた。山岸先生は、どのような絵画が好きだったのだろうか？著書の中では、ゴッホもセザンヌもフェルメールもレブランチも出てくるし、展覧会は近・現代絵画までおそらく幅広くご覧になっただろう。私が上野や竹橋などで、展覧会の機会に偶然先生を数回お見かけしたこともあった。デンマークの画家・ハンマースホイなども好きだと聞いたことがあった。

しかし、山岸健先生に最もふさわしい展覧会は、イタリアのフィレンツェ、ウフィッツ美術館などに所蔵されている、ルネッサンス古典絵画ではないだろうか。アンジェリコ、ボッティチェリ、ラファエロ、ミケランジェロ、レオナルド・ダ・ヴィンチなどルネッサンス絵画の魅力は、何と言っても「人間賛歌」である。「人間復興」「再生」の意味を持つルネッサンスは、いわゆる「暗黒の中世」を潜り抜けて、高らかに「人間復活」を宣言した。ローマン・カソリック教会の支配を超えて、ルネッサンスを迎えるのは、15～16世紀であるが、山岸先生も戦争中の子ども時代を終えて、新潟県から慶應義塾大学に入学したのは戦後のいわば、ルネッサンスの時代だった。また、山岸先生の社会学学説史は、A.コント、スペンサーの時代から力説される。山岸先生の博士論文は「ハーバート・スペンサーの社会学」である。最近の社会学理論に関心ある学生たちは、古くてもデュルケーム、ウェーバー、マルクス、ジンメルからで、シュッツ、パーソンズ、ガーフィンケル、ブルデュー、ルーマン、ギデンズなどの現代社会学理論で、コントやスペンサーから読み直す人はほとんどいないと言っても良い。もちろん、山岸先生も講義や研究・院生指導などで中心に置いたのは、A.シュッツなどの現象学的社会学だったかもしれないが、ハーバート・スペンサーなどの古典の基礎があったことも事実である。

しかし、山岸社会学の中心にあったのは、常に人間中心主義的なパースペクティブであった。その意味で、ルネッサンス古典絵画はおそらく山岸先生の最も依拠すべき中心に位置していたのではないだろうか。山岸先生は、人間の尊厳や自由、平等、博愛、個性を何よりも重視された。それは、人文学の基礎であり、人間中心主義の根幹であった。福澤諭吉先生思想の中心でもあるし、慶應義塾の学問、教育の根幹と言っても良いだろう。ルネッサンス絵画は「人間賛歌」だけではない。第二の特徴は、「自然賛歌」でもある。有

名なボッティチェリの『春（プリマヴェーラ）』や『ヴィーナスの誕生』は、自然賛歌の絵画でもある。『春』の足元に散りばめられた無数の草花や木々の芽吹き、あるいは、『ヴィーナスの誕生』で描かれる大きな貝や海の風景、鳥や魚や昆虫、神々の口から吹かれる風でさえ、自然の歌声となって、絵画に表現されている。

そして、ラファエロの名画『びわの聖母』や『大公の聖母』に描かれているのは、ルネッサンス絵画の第三の特徴である「家族愛」であろう。聖母子像は、言うまでもなく、マリアとキリストの生誕を表しているが、クリスチャンではない山岸先生が受け取ったのは、確実に「家族愛」であったと思われる。

山岸先生は、一人娘の山岸美穂さんを交通事故で亡くしている。私も妻を2003年2月に亡くしており、それから近かったこともあって、山岸先生の死別の悲しみは、近くで見ている痛々しかった。書かれるものには、亡くなって後も「美穂とともに生きている」と語り、死後も靈魂を信じている、先生の信念が表れていたが、同じ死別経験者である澤井敦先生や私には、その気持ちは痛いほどわかった。おそらく、ルネッサンス絵画の特徴である「家族愛」は、永遠に先生の胸に刻まれていたであろう。

絵画芸術は、見る人に「安らぎ」と「落ち着き」を与えてくれる。もちろん、家で画集を眺めているときでもそれは味わえないことはないが、やはり、美術館、展覧会場に実際に足を運んで、本物の絵画の前にたたずんだときに「安らぎ」と「落ち着き」は頂点に達する。それは、展覧会好きの私がもう60年以上経験してきていることである。もちろん、人が多くて絵の前に多くの人が並び、肩越しにしか絵が見えない時には、気持ちがざわつくが、それでも行かないよりは、気が休まるものである。

そして、古典絵画や歴史的な名画と出会うという機会は、「永遠」ということを感じる時でもある。カラヴァッジョというイタリアの画家がいるが、彼は、生前、相当な悪党で人を殺したこともあるという。文書資料で残っているのであろうが、彼がどんなに悪人であったとしても、彼の絵は500年も残っていて、現代でも名画になっている。彼が殺人犯として逃げている、悲惨な末路を迎えたとしても、カラヴァッジョの絵は「永遠」なのである。もちろん、殺人は悪であり、罪はまた、永遠に残る。しかし、彼の芸術は芸術として、永遠を示している。このことは、美や学問や芸術には、人間社会の規範やルール、制度とは別物の価値観が備わっているということも言える。山岸先生は、そのことを感じていたのではないだろうか？

展覧会に出かけるたびに、山岸先生の西欧への教養、知識、憧れを感じている。社会学だけではなく、三田の山の文学部の伝統ということかもしれない。青池慎一先生と共に、山岸健先生のご冥福をお祈りしたい。

（ありすえ けん 亜細亜大学都市創造学部教授/慶應義塾大学名誉教授）